機鋒

TOUGEN NEWS

1月31日（水）

発行所　桃源院
発行責任　桃源院　広報部
〒191-0065　日野市旭が丘1-10-4
編集　富田琢磨　田中高文
桃源院アドレス
http://www.momo.or.jp/

桃源院

創立は、約四五〇年前の天文十三年（一五四四）室町時代で、後奈良天皇の時代になります。

開山は、山形県米沢市万世町梓山、松林寺三世・一華宗甫和尚で、開基は十三代・茂庭左月良直といわれています。最初、茂庭氏が福島市飯坂町茂庭に居住した東原寺を建立しましたが、その後に米沢の川井に移り、桃源院を建てました。これが現在の米沢市川井の和合山桃源院です。

慶長八年（一六〇三）、茂庭氏は松山領主（現在の宮城県志田郡松山町）となり、慶長十年（一六〇五）に寺は千石村に移転しました。

最初に延命地蔵尊のまつられていた上野地蔵坂に建設され、延命山桃源院と改称しました。

寛永八年（一六三一）上野館の築城により、千石本丸の西側中腹の現在の地に地蔵尊と共に移転しました。

地蔵尊は、霊験あらたかなりと参拝者も多かったとされています。この地は、応永八年（一四〇一）文覚上人、即ち遠藤盛遠の九世従六位・上出羽守遠藤盛継が志田・加美・玉造三郡の奉行として来封以来、七代二〇〇年に亘り居城した所でもあります。

安政六年（一八五九）建立の文覚上人遺址碑と文覚上人垣雕の池があり、人工の池でありながら今でも水がかれることがありません。

昭和四十五年に遠藤家の七七〇年法要があり、石燈の記念碑が建てられました。本尊は、聖観世音菩薩で、堂内には弥陀の来迎三尊仏がまつられております。当寺には、松山初代良元の姉君、お南の方、法名「月窓妙光大姉」のお墓があり、五輪の塔の台座を御奉納とありますが、今は残されておりません。また、領主二代定元息女で、原田甲斐長男帯刀の妻「辰」の墓もあります。幕政期、茂庭家の当主は毎年正月二日石雲寺にある歴代の墓に参詣し、ついで桃源院の「古左月君之御影」即ち、左月良直像に焼香するのが例であったと記されていますが、今はその御影は残されていません。また、桃源院には宮城県松山町出身の洋画家「渡辺亮輔」、歌手のフランク永井の法名碑や墓もあります。

桃源院本院本堂落慶法要
首座法戦式

奥野健也（首座）
平成一年十一月十二日　生誕
平成十四年十月二十五日　得度
平成二十九年三月三十一日　慶応大学大学院経営管理研究科卒業
平成二十九年二月二十二日　大本山總持寺本山僧堂に安居

首座法戦式

法戦式とは、一人前のお坊さんになる為の段階で、通過すべき三つの儀式の一つです。

最初に行うのは「得度式」で、お坊さんとしての入門の式。

二番目が「法戦式」です。この式は住職に代わって仏法を説く事が許された者（首座）が大衆の前で問答を展開する式です。禅宗の法要の中で一番華やかで迫力のある式です。

そして三番めが「晋山式」で、住職としての披露の式です。

その二番目の儀式を行うのが今回の「首座法戦式」です。

今般、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災の強い揺れで、甚大な被害を受けた二百五十年の歴史の本堂の再建を成し遂げることができました。これも當院諸檀家一致協力のもと、多くの良縁に恵まれての賜と感謝しております。

そして新本堂の落慶法要を迎えられることを　當院開山・歴住諸大和尚に報告旁々　報恩感謝の法要も併修出来ました。。

また、時同じくして、西堂白槌師に角田市長泉寺大方丈を拝請して健也上座を首座に任じ　再会結制も無事に修行出来ました。

この仏縁をこれからも大切にして、ますます桃源院の発展を願いたいと思います。桃源院本堂復興再建委員会　会長　佐々木明雄

建設委員会　委員長　大黒勝雄

合掌

復興の流れ

祝落慶法戦

訃報

大林寺二十一世　茅岳俊孝大和尚

故　小澤俊孝　師

平成二十九年十月四日　遷化　六十七歳

山梨県北杜市明野町
曹洞宗大林寺　住職
三葉保育園　園長

桃源院東京別院　開創以来三十年以上に亘って、公私ともにご助力いただきました。

あまりにも早い別れに別院関係者一同残念な気持ちでいっぱいです。

長いお付き合いのなかで、毅然たる強さを秘めている反面、他人に対しては温和な態度を持って接し、自然に人を教化する、優れた人格の持ち主でした。幼児教育にも貢献された先生に哀悼の誠を捧げます。

秋雲院瓢韻清徳居士

故　森川清貞　氏　八十歳

平成二十九年十月二十一日　没

元　トランペッター

関東新生活互助会を退職後、桃源院東京別院に就職し、斎場の管理の仕事を誠心誠意全うしていただきました。時間の不規則な仕事なのに、愚痴も言わず、いつも明るく職場を和ませ、退職後は、お盆、春秋のお彼岸の合同供養に駐車場整理を進んで引き受けてくれました。

もうこの世にいないなんて、考えられない気がします。願わくば、もう一度、一緒にゴルフをして、もう一度、杯を傾け、ゆっくりと語り合いたかったです。

どうか安らかにお眠りください。

大本山總持寺　勅使門

大本山總持寺　桃源院本山参拝記念　平成29年10月17日

本院位牌堂

かねてより御案内の位牌堂の準備が遅れています。

六百を超える本数の位牌のため、製造に五ヶ月、彫りに二ヶ月を要します。

もうしばらくお待ちください。

本院春彼岸大般若祈祷会

三月二十一日（水）
午後二時

別院春彼岸合同供養会

三月十七日（土）
三月十八日（日）

京都　源光庵

平成二十九年
十一月十一日

鈴木正三

仁王禅

座禅は仁王のように勇猛果敢に修すべし

鈴木正三（すずきしょうさん）《一五七九―一六五五》
三河（愛知県）の徳川家の家来の家系に生まれる。本姓は穂秋ともいわれ、本名は重三。通称九太夫。玄々軒、石平老人と号した。関ケ原の戦、大阪夏冬の陣に参加したが、子どもの頃から出家願望が強かった。転戦の合間に各地のお寺を多く訪ね、四十二歳で出家した。臨済の大愚らに学び、のちに故郷に帰り恩真寺（豊田市）を創建した。晩年に江戸に下り、重俊院（四谷）、了心院（浅草）で教化に努めた。一宗一派に固着しないで、臨済の師家と多く交わったが、曹洞宗にも共鳴していたようで、開山した寺院も、弟子たちの寺院も曹洞宗に属している。

（前号より続く）

風性常住 無處不周
（正法眼蔵現成公案の巻）

これは、道元禅師が天福元年（一二三三）九州鎮西の俗弟子、楊光秀に与えたものです。

師・麻谷宝徹和尚、扇を使う次いで、僧問う、「風性は常住にして処として周からずということ無し。和尚、甚麼と為てか却って扇を使う」。師云く、「汝は只だ風性常住なることを知って、且つ処として周からずということ無きことを知らず」。云く、「作麼生か是れ処として周からざること無き底の道理」。師、却って扇を揺がす。僧 礼拝す。

唐の時代、馬祖道一禅師の法を嗣いだ麻谷宝徹和尚（生没年不詳）の話です。扇風機もエアコンもないある夏の日です。宝徹和尚は暑さをしのぐ為、扇子を使って涼んでいます。そばにいた一人の修行僧が質問します。

「風性、つまり空気は何時でも何処でも満ち満ちている。それなのに何故扇を使うのですか」。

和尚はそれを聞くと、「空気が何処にでもある事は知っているけれど、まだ空気はすべてに行き渡っているという道理を知らないな。」と誡めます。

すると僧も切り返します。「空気が何処にもあるという事と、すべて何処にも行き渡っている事とは一緒の事ではないか、あえて和尚が空気は何処にも行き渡っているという、その訳を聞かせて下さい」と問いかけますが、和尚はただ黙って扇ぐのみだったというのです。

麻谷和尚は何を云おうとしたのでしょうか。

中国の詩人蘇東坡が、

溪声 即ち是れ広長舌
山色 豈に清浄身に非ざらんや

というように、渓流の瀬音は真仏の声であり、山の峰はみな真仏の姿であり、森羅万象はすべて仏性（悟り）であり、その仏性は空気のように私達の回りに満ち満ちているのです。しかし「扇ぐ」という実践があって、初めて認識出来るというわけです。私たち側から認識しなければならないのです。

道元禅師は、

「この法は、人々の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるには

馬祖道一禅師

あらはれず、証せざるにはうることなし」

と言っています。

スポーツも芸も技術も学問も・・・・・・すべての道は、練習、修行、鍛錬、研究等で高みに登っていくのです。知っているだけの知識では何にもならないのです。

さらに正三老人はこの実践を激しく鼓舞するのです。ともすれば如来禅とか祖師禅は、対する敵がいないために、正三老人の言葉を借りていえば、「ぬけがら禅」になりやすい。「そのまま仏性だ、すべてが仏性だ、」と言って修行を怠り、坐禅していても、居眠りしているということもある。これを批判したのが正三老人の仏王禅で、当時の長老といわれる師家たちも、正三老人の前では、手も足も出なかったようです。

彼の禅風は「勇猛禅」であって、目をむき、歯をくいしばり、敵陣に斬りこむ姿勢であり、煩悩の群がる中で、これを刺し殺し、斬り伏せるという修行です。つまり煩悩があるという立場であると認めた以上、煩悩も必死に攻めて来るだろう。だから修行は戦場だというのです。

しかし気性の激しい人ほど情にもろいといいます。正三老人もこれに違わず、一方では厚い人情面もありました。つまり、無常を深く理解していた人のようです。歌も詠み、「二人比丘尼」などの悲哀のこもった人情話も書いています。

あらすじは、一人の若く美しい女性

京都　東福寺

平成二十九年
十一月十一日

が、戦での夫の討ち死に、悲歎のあまり弔いの旅に出るのです。そして最後にはわが身にも無常を観じて仏門に入るという物語です。

いやましのおもひぐさ、やるかたなく、かなしびのなみだ、まなこに遮り、すいちゃう（翠張）こうけい（紅閨）に枕をならぶるゆかのうへ、なれしふすまの夜すがらも、だうけつ（同穴）のあと夢もなし。

せめて我がつまの、むなしくなりしその跡をたずねまほしく、思ひねの、夢路にたどるここちして、そなたの空のなつかしさに、夜半にまぎれてしのび出で、あしにまかせてたどり行く、心のうちこそかなしけれ。

人めもわかぬ我がすがた、いつまで草の露の身を、ひよく（比翼）、れんり（連理）とちかひに、心のほどのはかなさよ。

ごつごつした仁王禅を説く正三老人の文章かと疑いたくなるような流麗な文体です。

女人が夫の討ち死にした近くの家に、一夜の宿を借りるのです。そうするとこの家の女房が、討ち死にした夫の名前を知っていて、勇敢だった戦いの話を語って聞かせ、ともに抱き合って夜ふけるまで歎き悲しむのです。

しばなく鳥の数そひて、よもしらじらと明け渡り

早朝、彼女はこの家を後にして、茫々たるすすきの野を、さ迷い歩いて、わが愛しき夫の討ち死にの場所を探し巡り、とうとうそこで一夜を過ごしてしまうのです。

はなすすきまねかねばここにとまりなん

いづれの野辺も、つゆのすみかぞ

夜も深まると、ここからしこから、がい骨が集ってきて、彼女に話しかけます。

いかに女性きこしめせ、御身とわれと別ならず、へだて給ふはあやまりなり。御身のかたちのうるはしきは、何なれば、此のほねのうえにのみ、肉と皮との かかりて、色どりたる故也。……此のかり物を我が身とおもひ、迷ひ給ふ故により、（御身を作りし地水火風の）火は瞋恚（怒り）のほむらと成りて胸をやき、水は淫欲のたねと成りて愛着におぼれて、苦海にしづむなり、風は心をひるがへし、輪廻のたねとなり、土は愚痴のたねと成りて、無明の地獄にいるなり。

聞きなさい、あなたの美貌と、がい骨とは決して別ものではないのですよ。確かにあなたは美しい、しかしその肉体・容姿は、がい骨を肉と色よい皮膚とで覆っているだけの話です。死ねば肉と皮膚は腐ってがい骨になります。ただ借り物の肉体を、自分の物と思い込むことで苦しみの世界に迷い込んでしまうのです。（肉体の要素は、土地の養分。血や涙、汗や体液などの水。体温の火。息を吐く風と昔は考えられていました）

火は怒りとなって胸を焼き、体液は愛欲・性欲のもととなって、苦しみの海の底に迷い込んでしまう。息遣いは心を隠し、地の養分は肉体・容姿を作るが、その一方コンプレックスの種ともなる。

がい骨がこのように語りかけるのです。

夜が明け夢からさめた彼女は、さらに奥深くさ迷うのです。とある庵に行き着いて一夜の宿を乞う。そこにもは二十歳頃の美しい女性がいて、師と慕う尼僧の死に会い、つづいて夫の病死に会って、つくづくと自分の不幸を嘆くのです。

お互いの不幸を歎きあって、彼女はしばらくここに滞在します。ところが間もなく、風邪がもとで、この女性も夫のあとを追って息を引きとるのです。

はなと見し人の面かげいつのまに
野辺のかばねとなるぞかなしき

このようにして、彼女はついに菩提心をおこし仏門に入って悟りをひらく。いわば魂の遍歴を物語る作品です。

正三老人の「仁王禅」を勇猛に実践する、その気性の激しさの一方には、哀れを説く、情厚く繊細な一面があったのです。

「最も剛毅な者は最も柔和なる者であり、愛（仁）ある者は勇敢な者である」と新渡戸稲造はその「武士道」でいっています。

正三老人は若い頃、関ヶ原の戦も、大阪夏冬の陣も戦い抜いた武士だったことを思い起こさずにはいられません。

（次号に続く）

桃源院本堂復興再建落慶法要
結制再会・開山歴住報恩供養

報恩感謝

平成29年10月30日（月）
31日（火）

特請尊宿

白槌師
角田市長永寺　奥野哉賢　大方丈
御本寺
米沢市松林寺　神保滋宗　大方丈
大本山永平寺御事使
古川　富寿寺　木村邦道　大方丈
大本山總持寺御事使
三本木大性寺　渡邊一英　大方丈
曹洞宗宗務庁所長
石巻市洞源院　小野崎秀通　大方丈
曹洞宗宗務庁第九教区長
松山桂雲寺　花山智信　大方丈

法要差定

十月　三十日（月）
首座入寺式
開山歴住報恩逮夜
配役本則行茶
祝宴・宿泊（松島大観荘）
十月三十一日（火）
本堂落慶法要
落慶記念式典
開山歴住報恩諷経
首座法戦式
記念撮影
設斎（換茶）